

ワークショップ「観測・視覚化と実在」提題要旨

科学的事実論論争における観察装置をめぐる議論

大西勇喜謙（総合研究大学院大学）

科学的事実論論争とは、科学で措定される観察不可能な（unobservable）事象（対象やその振る舞い）の真理性をめぐる論争であり、ここでいう「観察可能性」は通常、代表的な反事実論者である Van Fraassen の用法にならって、肉眼での観察可能性を指す。であれば、目には見えないものを「見える」ようにしてくれる観察装置の役割や、それによって「直接」得られた知識の地位などは、本論争において中心的な議論の対象となつてよいようにも思われる。しかしながら、近年の論争は主に、科学理論の近似的・部分的真理性をめぐる論争となっており、観察不可能な対象の実在性の問題も、そうした理論の近似的真理性をとおして扱われているように思われる（実際、スタンフォード哲学辞典においても、科学的事実論は、「既存の最善の理論やモデルの内容に対する肯定的な認知的態度」と特徴づけられている）。とはいえ、観察装置をめぐる議論も 2000 年代頃まではしばしば見られ、そうした議論が平行線を辿ったことが、本論点が盛んに論じられなくなった一因となっているとも考えられる。本発表では、科学的事実論論争の基本的な構図とそこでの観察可能性の位置づけを確認するとともに、観察装置による認知的アクセスの拡大に関する事実論側の議論、それへの応答として提出された、反事実論側による観察装置の位置づけについて紹介し、観察装置をめぐる事実論、反事実論間のすれ違いを確認することで、本ワークショップにおける議論の素地を提供したい。具体的には、前者については Hacking や Kitcher, Humphreys らによる、ある種のオーバーラップに依拠した議論を、後者については、Van Fraassen による、公共幻影（public hallucination）を生み出す生成装置（engines of creation）としての観察装置の捉え方について紹介する。